

学問知と臨床知をむすぶリエゾン講座

—学生と現職者（管理栄養士・養護教諭）が共に学ぶ環境づくり—

食品栄養学科 管理栄養士：大山珠美、太田たか子、平本福子

養護教諭：高瀬チエ、戸野塚厚子

本学科では管理栄養士、養護教諭を養成しているが、専門家教育においては益々、高度化した専門的な知識や技術が求められている。一方、食や健康の分野では、より実践性の高い知識や技術が重要とされている。

近年、専門家養成では現職の実践者を大学に招いての講演等がなされ、また、現職者のみを対象とした研修講座は多く開催されている。しかし、実践者と学生がひとつの課題を通して、共に学び、

1. 実践者と学び合うリエゾン講座—管理栄養士養成から—

【はじめに】栄養士法による管理栄養士は「傷病者への療養指導」、身体状況に合わせた健康増進のための「個人への指導」など、「人」への栄養管理や指導を行うのが管理栄養士の仕事とされている。「人」を対象に扱うことは、マニュアル通りにいかないことも多く、実践経験を積み重ねる必要あるが、現行の管理栄養士養成課程における臨地実習は 180 時間であり、諸外国の実習時間と比べても日本の状況はとても低いのが現状である。アメリカでは Registered Dietitians の試験を受けるためには 900 時間以上の実習を行い、実践力と技術力の統合を図るように設定されている¹⁾。一方、日本では近年の生活習慣病の増加に伴い、特定健診後の特定保健指導によって生活習慣を改善する取り組みが 2008 年度より始まり、この指導者として管理栄養士は中心的な役割



語り合う講座（学問知と臨床知の融合）はほとんどみられないのが現

状である。

そこで、管理栄養士や養護教諭の実践者と学生が学ぶリエゾン講座を開催し、その教育効果を検証することとした。

を担うこととなった。生活習慣を改善するための行動変容を促すためには、情報提供による知識を深めるだけでなく、自らの健康管理ができるように支援していくことが求められている。しかしながら、管理栄養士の免許を取得していても実践の場での活動が教育の場とのギャップに悩む卒業生も少なくないのが現状である。このため、大学での知識を基礎とした実践力を養うことが求められている。

今回は特定保健指導を中心に、実践者であり、指導者への教育も行っている佐野喜子氏に行動変容につながる指導についての講義・演習（以下、講座とする）をお願いした。受講者は実践の場で活躍する管理栄養士・栄養士の有資格者（以下、実践者とする）にも参加を呼びかけ、実践者と学



生が学びの場を共有することで、学生の実践力を高めることをねらいとした。

【実施内容】受講者の募集は、学内においては掲示を行い、学外者については卒業生や栄養士会を中心に案内をメール、チラシの配布を行った。受講者は実践者 11 人、学生 1～4 年生 66 人となった。講座終了後にアンケート調査を実施し、受講後の感想や実践者とともに受講することの効果についての評価を行った。

講座は、2011 年 2 月 5 日（土）10 時～12 時 K209 教室において、講師は(株)ニュートリート代表 佐野喜子氏にお願いした。

講座内容は、定健康診査後の特定保健指導を想定して、積極的支援の必要がある人への個別指導を行い、生活習慣の行動変容につなげて成果を出すための技法についてであった。講義内容の要点は以下の通りである。

- ・生活習慣改善においては、相手のアドヒアランスを高めることが大切。

- ・生活改善のために必要な視点は
 - ①相手が目的を理解し、必要性を実感している
 - ②目標や実践行動を相手自身が決める
 - ③セルフモニタリングをして継続する

- ・行動変容ステージ²⁾によるステージ別の会話からステージを確認し、適切な支援をする

以上を佐野氏の体験談や受講者が隣席の人と会話しながら自分自身を確認する体験、実感する時間を交えながら、講座は進められた。

佐野氏は従来、多くの保健指導や栄養指導においては知識や情報の提供にとどまり、なかなかク

ライアントや相談者が行動変容につながらないのが現状であったが、行動変容につなげるためにコミュニケーションをとりながら、相手の視点に合わせて考えていくことが大切である。例えば、できないことを指摘するよりも、できたことを褒めていくことにより、コミュニケーションもとりやすくなり、行動変容にもつなげられることを強調し、最後には、相手を駄目だと決めつけしないで、望みを持ち、支援することが重要であると述べていた。

【結果および考察】アンケートの回収数は 74 人

表1 解析対象者の内訳 (回収率 96.1%)であった。対象者の内訳は表 1 に示す。学生においては 2 年生を中心に 63 人、実践者は 11 人だった。

	人数 (人)	パーセント
1年	15	20.3
2年	29	39.2
3年	12	16.2
4年	7	9.5
実践者	11	14.9
合計	74	100.0

表2 栄養士・管理栄養士の職務経験年数

	人数 (人)	パーセント
5年未満	2	18.2
5～10年	4	36.4
10～20年	1	9.1
20年以上	3	27.3
なし	1	9.1
合計	11	100.0

実践者の実践経験は半数が 10 年未満であり (表 2)、職域は

行政職が 40%弱で次に地域栄養士が多くを示し

表3 栄養士・管理栄養士の職域

	人数 (人)	パーセント
行政	4	36.4
地域栄養士	3	27.3
病院	1	9.1
その他	2	18.2
無職	1	9.1
合計	11	100.0

たが (表 3)、栄養指導の頻度は月に数回～ほとんどない人が 80%となり、指導の経験の少ない人が多くを占めた。

表4 受講者の参加目的

(複数回答)

目的 人(%)	コミュニケーション技法	保健指導の方法	気づきの質問技法	行動変容の技法	その他	特になし
1年 15(20.3)	6 (40.0)	6 (40.0)	4 (26.7)	3 (20.0)	1 (6.7)	4* (26.7)
2年 29(39.2)	20 (69.0)	14 (48.3)	13 (44.8)	13 (44.8)	2 (6.9)	1 (3.4)
3年 12(16.2)	5 (41.7)	9 (75.0)	5 (41.7)	5 (41.7)	0 (0)	0 (0)
4年 7(9.5)	4 (57.1)	5 (71.4)	4 (57.1)	4 (57.1)	0 (0)	0 (0)
実践者 11(14.9)	5 (45.5)	2 (18.2)	6 (54.5)	6 (54.5)	1 (9.1)	0 (0)
合計 74(100)	40 (100.0)	36 (100.0)	32 (100.0)	31 (100.0)	4 (100.0)	5 (100.0)

*誘われたから、試しにを含む

受講者の参加目的はコミュニケーション技法、保健指導の方法、気づきの質問技法、行動変容技法を約 30～40 人が回答していた。1、2 年生には「誘われたから、「試しに」といった自らの決断で参加していない学生も見られた。

内容の理解については全員が「よくできた」「ややできた」と回答しているが、学生においては高学年で「よくできた」の回答率は高くなっていた。受講による自身の目的達成については、全員が「よくできた」「ややできた」と回答していた。内容を生かす自信については多くが「できる」「ややできる」と回答したが、実践者が 1 名のみ「あまりない」と回答し、学生では 1 年、2 年において「あまりない」「ない」の回答が他の学年に比べ多くみられた。本学では栄養指導に関する授業は 1 年次から始まっているが、基礎科目を十分に習得していない中で、このような関連科目を活用しながらの栄養指導、保健指導についての講座内容を理解することは少々難しいかと思われた。

さらに、講座により新たに気づいたことについて自由記述による回答を求めたところ、実践者、学生を含め 71 人の回答を得ることができた。記述された文章からテキストマイニングを行い、12 のカテゴリーを抽出した。11 件以上の出現頻度の高いカテゴリーとして、「会話」「褒める」「行動」「コミュニケーション」「指導」があげられ、これらには「大切」「相手」と結びつくものが多く、相手との会話やコミュニケーションを大切に、褒めることによって、行動を変えられることを感じていると考えられた。講座の中では相手の立場にたって、相手に受け入れられるような話し方やコミュニケーションの取り方、そして、行動変容につなげるための支援について話されていたが、事例を多く挙げながら、周囲との意見交換の中で考えるスタイルがより、受講者への説得力

を増したと考えられた。

今回のもう一つのねらいである、実践者と一緒に学ぶことの重要性について検討するために、学生に「実践者と一緒に講座を聞くことについて」の自由記述を解析したところ、48 人からの回答を得られた。「何も問題ない」、「感じない」など自身の不利益のみに注目した意見が 8 件（16.6%）みられたものの、「学ぶ姿勢を見て刺激された」、「社会が人うなずいたり、メモをとっている所が大切なんだと感じた」など、実践者を観察し、そこから学ぼうとする姿が見られた。また実践者の発言内容から「学生にはない意見を聞いた」等、学生と実践者との考え方や捉え方、生活習慣の違いを感じとった意見が 18 件（38%）あった。数値化はできないが、これら影響の背景には、講師による問いに積極的に手を挙げて回答する実践者の姿があり、それに引かれるように学生も質問に答えていくといった光景が見られたことが一連の結果に影響を与えていると考えられる。このように一緒に講座を受講することにより、学生にとっては実践者の行動や考えを見つける良い機会となったようである。

さらに、学生の自由記述の中には「実践の場ではうまくいかないこともあることを知った」など、現実にはスムーズに指導が進まないことに驚く意見も複数あり、テキスト通りに進むと考えている学生がいること明らかとなった。また、すでに数人の実践者である非常勤講師からの授業を受けているにもかかわらず、「実践者の話が聞けて良かった」との回答がみられた。管理栄養士の養成課程では、実践を睨んだ教育がとても重要ではあるが、管理栄養士免許取得には国家試験があり、免許が得られなければ実践の場に立てないため、テキストを理解することが優先されていることも否定できない。また、実践の場では基礎科目、

専門科目を網羅しての活動が求められるが、授業ではそれぞれの教科に特化した内容になっていることも影響していると考えられ、基礎科目と専門をつなぐ、実践的な授業をつくっていくことが必要であると考えられる。

今回の講座は実践者と学生の双方に学びの多い内容であった。参加した学生の将来の職種として、管理栄養士・栄養士を望んでいることから(図4)も実践的なスキルを学ぶ場として、また、将来像をイメージすることにも有用であると考えられた。今後も実践者の卒後教育として、また、学生の専門家教育の場として、このような講座を開催することは有用であると考えられた。

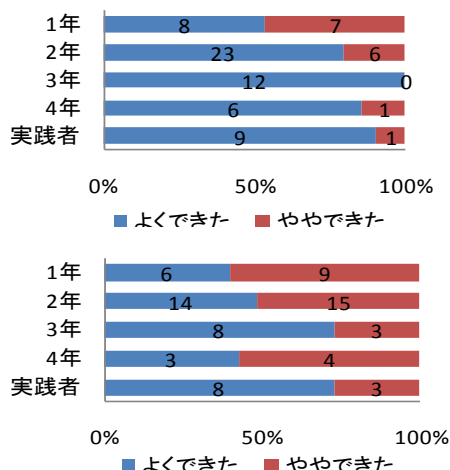


図2 参加目的の達成

養護部門課題名

2. 教育実践の文脈で養護実践を問う

【背景・目的】

養護教諭部門では、教育実践の文脈で養護実践を問うというテーマを掲げ、講師に渋谷和子氏をお招きして、学生との意見交換会、講演会、講演を受けてのディスカッションを実施した。渋谷氏は教育としての健康診断をはじめ、健康教育の立場から食育に関わる実践を創造してきた養護教諭のリーダー的存在である。

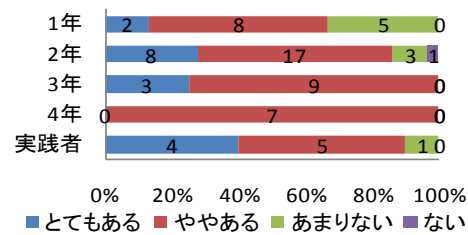


図3 講演内容を生かす自信

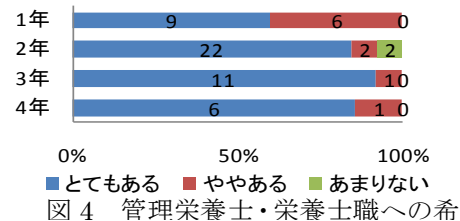


図4 管理栄養士・栄養士職への希望

【参考文献】

1) American Dietetic Association. Commission on Accreditation for Dietetics Education (CADE) .

<http://www.eatright.org/students/>

(2011年2月25日アクセス)

2) Prochaska JO et al, Changing for Good, HarperCollins Publishing, 2002: 21-69

そして、氏の実践は、保健室の問題を教育課題として学校全体で取り組むものとして発展させていることに特徴がある。

日々の仕事をこなすというレベルから自らの実践を創造できる養護教諭として成長していくためには、教育とは何か、子どもの最善を考える実践とはどのようなものかということに関わる「観」を醸成することが

必須である。そのため、今回は、渋谷実践を支える教育観、実践観を読み解き、共有することをねらいとした。実施内容は以下に示すとおりである。

【実施内容】

実施日：2010年11月26日

1) リエゾンゼミ 14時20分～15時30分

家政館食品栄養学会室において、養護教諭を目指す本学学生、大学院生、教員（戸野塚）、助手（丑田、遠藤）で渋谷先生を囲んでのリエゾンゼミを実施。

渋谷先生が自分史、養護教諭としての成長の過程（キャリア形成）について話しをしてくださり、それを受けて意見交換をした。

2) 講演会 17時20分～19時00分

テーマ：教育実践の文脈から養護実践を再考する～これからの養護教諭に伝えたいこと

参加者：66名（本学学生・院生47名、他大学学生8名、現職養護教諭7名、本学教員4名）

3) 講演会を受けての意見交換会

学生から出た意見、養護教諭から出た意見を抜粋して紹介する。講演を受けて意見交換するは、演者は、自身の実践を対象化するきっかけに、参加者は各自が講演をより深い理解へと発展させる契機となった。

4) 学生によるカフェトーク（山形大学との交流）

○学生からの質問：渋谷実践の実現に学校規模が小規模であることが関係しているのではないかと？

物理的条件は考慮すべきことではあるものの、小規模だからできたということではない。実践はどこの学校でも創出できるものであるし、大規模校であればその学校の有り様からその学校にあった実践を創出していくのであるという応答があった。

○養護教諭からの質問：自分も教育実践を創出したいと考えているが、他の教師の理解や自分が講師であることなどからなかなか上手くいかない。なにかアドバイスはないかと？

その学校の教師の実態を鑑みながら、自分一人ならここまで出来ると思ったとしても教師集団としてみた時にはここまでの目標が妥当かなという見極めをする。教師集団が実践をとおして一緒に育っていくこと、みんなで実践を創っていくことを大切に。なぜなら、

そうしないと、その養護教諭がいなくなると出来なくなる、実践が継承され発展していかないからである。

渋谷実践は、まさに学びの共同体づくりであり、育ちあう関係性を重視したものである。

このような渋谷実践の根底には、全生研での学びやマカレンコ思想があること、大学時代に養護教諭の専門教育だけではなくもっと広いところから教育を問うたことが実践を支えていることを確認した。

【結果及び考察】

不満足や否定的評価の感想はなく、積極的に満足や感謝を記述していた参加者が40.9%、質問や触発されたことを記述している感想が48.5%、自らの実践や学びを振り返った感想を書いているものが18.2%と良好な結果となった。以下に、参加者の感想を一部抜粋して紹介する。

感想①：連携・共通理解・連携という話をよく聞きますが、なぜ連携が大切なのかということが、具体的な事例を聞く中で、今まで以上に理解が深まった気がします。貴重なお話を聞くことができてとても良かったです。今後、自分が現場にでて、“実践”する場面にあった時は、“子ども主体”の子どものための教育を学校全体で行動していける様に、そのためのアンテナの根っこの情報を日頃からたくわえようと思います。また、意識・知識・行動という流れの中で、自分の中にゆるがない確かな願いや目標、課題をもって進んでいける様、しっかり学ぶ必要があると思えました。頑張ります。ありがとうございました。【本学学生】

感想②：教採や実習が終わり、少し養教の仕事がぼやけてしまっていた部分と、私は養教に向いているのかなとか色々悩むことも多かったのですが、今回の渋谷先生のお話を聞かせて頂いて、うまく言葉には表せないのですが、前向きに考えられるようになりました。子ども達だけでなく教師の意識も変えることも必要だという点、いいものは受け継がれていくという点など勉強になりました。養教になったら最初は失敗ば

かりかもしれませんが、その失敗の中でも得られることは多いこと、目的、ねらいをきちんともって実践していくことなど、大切にしていきたいと思いました。今回は、貴重な時間本当にありがとうございました。【他大学学生】

感想③：私は、大学院生ですが、大学において伝達型の教育しか学んできませんでした。先生のお話は、とても新鮮に感じました。種まきの時期があること、教師との協働であること、科学に基づいたものとすること…など、私の中に引き出しがたくさんできました。【本学大学院生】

感想④：渋谷先生が気づいた子どもの変化から始まった保健指導から、子どもたちだけではなく、全校、家庭へと広がり、行動変容へつながったところに渋谷先生のパワフルさと保健指導の持つ力の大きさに驚きました。私も子どもたちに何かを伝えるときには「こんな風になってほしい」「こんなことは知ってほしい」という思いをもちながら行うように心がけていますが、思いや願いの力が“大切なのだ”ということを改めて感じました。今、ここに言葉にすることは難しいのですが、渋谷先生の言葉の一つ一つが心に残るものとなりました。お忙しい中ご講演いただいた渋谷先生、講座の準備をくださった先生方、本当にありがとうございました。

【現職養護教諭】

感想⑤：今まで、私は養護教諭として学校現場で健康教育を促していけばいいのかわからなかった。自分1人では決して出来ないし、他の先生方の協力が得られるのかも分からず、不安であった。だが、今の講義を受けて、他の先生方も巻きこむことは可能であり、働きかけが大切であることが分かり、やる気がでた。私も日頃から「種まき」を行い、個人そして組織全体に新たな風を吹かせていければいいなと思いました。本日はありがとうございました。【現職養護教諭】

感想⑥：1年生なのですが、今まで養護教諭としての仕事は保健室にいてけがを手当てしたり、そんなものだと思っていました。けれど、それだけなのかな？と疑問に思うこともありました。今回

のお話で、養護教諭も子どもたちの発達・学習へ大きくかかわっていることを知れてよかったです。自分にもそんな指導ができるか不安もありますが、頑張りたいと思います。またお話を聞きたいです。ありがとうございます。【本学学生】

感想⑦：T・Tの実践がこんなに楽しそうなものだと知りませんでした。渋谷先生もたくさん悩み、その上で実践が出来上がってきたのだとわかりました。私も児童・生徒・先生・地域の人々を含めた教育ができるように、養護教諭になって頑張りたい。【本学学生】（傍線筆者）



実践者は、実践創出の基盤である「願い」や教員集団との協働の重要性について記述している。学生・院生は、教育実践が地域や保護者との連携で創られていくこと、養護実践が保健室だけの対応ではないことに開眼したことを記述している。この感想からも、教育実践とは何かということにこだわり続けてきた渋谷実践が多く参加者を触発し、自らの実践の省察、「観」を醸成する契機になったことを確認した。また、渋谷実践をコアにしながら、学生・院生、養護教諭、大学の教員の双方向のやりとりを可能にしたことで自らの実践や観をより深く問うことが出来た。

【参考文献】

1) 秋田喜代美・市川葉子・鈴木宏昭 (2003)

授業における場面の記憶：参加スタイルと記憶，東京大学大学院教育学研究科紀要，42，257-274

2) 渋谷和子 (2000) 『養護教諭の役割と教育実践』学事出版



